

ふるさとの祭りと年中行事

6

盆

—そのルーツと現代的意味を探る—

* 文明としてのイエ社会の年中行事 *

根深ければ枝さかえ

私たちの祖先は、何よりも人と人とのつながりを大切にしてきました。精霊祭りの座にあるとき、人間の生き方・人間という存在の深さに触れずにはいられません。

ご先祖の霊（精霊）を家に迎えて祭る行事に盆があります。盆は、仏教では「盂蘭盆経」にもとづいて釈迦の弟子である目連が、餓鬼道におちた母をはじめ七世の父母を救うために、夏安居を終えた僧たちを旧暦七月十五日に供養したのにはじまるといわれています。わが国では齊明天皇三年（六五七）のこの日に父母のために「盂蘭盆経」を誦させたのが最初だとされています。

盆の行事は七月一日にはじまり、この日は地獄の釜の蓋のあく日といわれ、新盆の家では竹竿に灯ろうをつけて軒に立てかけます。またこの日には祖霊の通る盆道もつくられます。

現在は星祭りとして知られている七夕も、もともとは、「ナヌカボン」といわれ、仏具洗い、墓掃除、井戸さらいなどを行う日でした。そしてこの日から盆の物忌に入りました。

十一日～十三日には盆花迎え（仏様迎え）、盆棚つくりがあり、十三日の夕には精霊が迎えられます。

十五日ごろには檀那寺で施餓鬼が行われます。これは、帰るべき家をもたない餓鬼たちを僧侶が供養して仏弟子として成仏させ、その回向の功德が、檀那の先祖たちに及ぶ

を交わし合います。このときの贈答が中元（七月十五日）と呼ばれています。平素会うことのできない人たちがお互いの無事を確かめ合い、先祖とのつながりを確認し、祈りをこめます。ですから盆は、祖霊の祭りであるとともに、生見玉（生者の霊魂）の祭りでもあります。

このように盆は、七月の半分以上にわたる行事です。子孫たちが、祖霊を共同で祭ることによって家族・同族更にムラ人相互のつながりが確認され、それが盆踊りなどを通して強い連帯意識となっていくきます。この同朋意識が町づくりの力強い原動力となっていくきます。

ことを祈って作法を終わっています。この儀礼によって家々では餓鬼に煩わされることなく先祖祭りができるのです。

十三日～十五日には家族・親族たちは盆参りをし、盆礼

盆の際の連帯と集団的高揚は、盆踊りに生き生きとパフォーマンスされます。

十六日の夕には送り盆があります。盆棚がかたづけられ灯ろう流しが行われます。

ところで「仏の正月」という年中行事がありますが、一見何のかかわりもないように見える盆と正月（大・小）を比較し、その類似点・相違点を改めて見直してみると、なかなか興味ある問題ではないでしょうか。そこには意外な、必然的な照応がみとれるはずですから……。

上町のみなさんの協力で行われた老人ホームの盆おどり大会(%)

(文化財審議委員 藤代弘一)

